
J.M.W.ターナーの"洪水"観—《光と色彩》《影と闇》

岩永 亜季

九州大学大学院

J.M.W.ターナーは 1843 年、ロイヤル・アカデミー展に 6 点の作品を出品した。その内《光と色彩》《影と闇》はノアの洪水を主題とする対作品である。1840 年にイーストレイクによって英訳版が刊行されたゲーテの『色彩論』を受けて描かれたこの洪水連作は、ターナーの代表作と見なされているにも関わらずいまだ十分に研究がなされているとは言い難い。本発表では、この内《影と闇》と酷似した構図の作品《洪水の夕べ》を洪水連作と比較考察し、洪水連作理解の一助とすることを試みる。

《洪水の夕べ》は既に述べた通り《影と闇》と似た構図を取ることから、1843 年頃に制作されたと考えられているが、具体的な制作時期に関しては諸説分かれている。しかしこの作品を洪水連作の共通点や差異を明確にすることで、作品の構想から制作に至る過程を推察出来るのである。

《洪水の夕べ》と《影と闇》との違いは、まず古生物と思われる動物の描写にある。《洪水の夕べ》前景右部の岩場に描かれた動物は、先行研究でプレ・ダーウィニズムの影響を指摘されており、魚竜あるいは古代のワニと考えられている。洪水論など当時の地質学理論とノアの洪水との密接な関係、ターナーとロンドン地質学会の密なコネクションからこの説は有力である。しかし《影と闇》では、この動物は白く掻き消すような筆致で目立たぬように描かれている。本発表では《光と色彩》のある細部に着目し、《洪水の夕べ》に見られる地質学理論の影響が《影と闇》ではなく《光と色彩》に継承されていることを指摘する。

また、《洪水の夕べ》と《影と闇》それぞれの前景に描かれた人物群や家畜達にも差異を指摘出来る。《洪水の夕べ》の横たわる人物群が下半身を覆う赤い布や天幕、ワイン壺によってノアの酩酊やロトの物語を想起させるのとは異なり、《影と闇》の人物群は全裸であり、人物の数も増えているように見える。《洪水の夕べ》が単独の作品として構想・制作されていたと仮定すると、このような人物描写は、洪水という神の手による大災厄の後の事件をも想起させるという目的のもとになされたと考えられる。一方《影と闇》には洪水後の光景を描いた《光と色彩》が対作品として存在しており、その後の人間の有り様に対するターナーの考えが自作詩『希望のむなしさ』を通して表明されている。洪水後までを単独の作品から想起させる必要がなくなったため、人物群の描写に変更が生じたのではなかろうか。

更に洪水連作における色彩の用い方から、ゲーテの理論は《洪水の夕べ》制作以降、洪水連作制作以前に作品に導入されたと考えられる。相対する 2 者の合一がしばしば『色彩論』に説かれていることは、洪水連作が「連作」として制作された理由のひとつであろう。

これらの検討結果から、本発表では《洪水の夕べ》を洪水連作の先行作例と推定し、更に単なる試作例ではなく独立した作品と位置づける。この作品と洪水連作の表現について論じることで、洪水連作における『色彩論』受容の重要性、ターナー独自の宗教観、当時の科学理論との接近を明らかにすることが出来るだろう。